

事する地球物理学者の多くは、データやモデルという姿に焼き直された「自然」を見ることに慣れすぎているため、いきおい、既にカテゴライズされた噴火様式や火山タイプから解説をはじめ、いかにして現象を測定するかという話になりがちなのである。自らの経験を顧みるに、この導入方法は初学者にはあまり効果的ではない。この二書に共通するのは、まず事物の美しさと、それに触れたときの感動を素直に伝えようとする著者の意図であり、この導入によって、著者は読者の興味を誘い出すことに成功している。『火山噴火——』においては、まず適度に既成概念を排除した形でモノ（パーツ）の観察が行われ、徐々にそれらの背後にある論理やからくりが肉付けされて、噴火現象という複雑な表象が語られることになる。これによって、読者は火山学者の思考の足跡を追体験できるという仕掛けである。

『火山噴火——』では、引き続いて火山観測と噴火予知に関する章が設けられている。本書では、噴火予知は現在、部分的な実用段階にあり、各種の観測をすればこれこれのようなことがわかる、という立場でさらりと書かれている。この部分は、噴火予知研究に携わる者の一人としてはやや不満が残る。噴火予知研究の現状を社会によりよく理解してもらうには、今やこうした好材料だけでなく、我々研究者が直面している課題や抱えている苦悩、新しい取り組みといった側面についても、さらに立ち入った紹

介がなされるべきである。著者も触れているように、現在の噴火予知研究は、社会的に要請されていることからの一部にのみ応えているに過ぎないのだ。これらのことは、本書の文脈の中では決してネガティブな事実ではなく、むしろ読者からみて火山学者という人々をさらに身近に感じさせる方向に働くに違いない。

<目次>

『火山噴火—予知と減災を考える—』

カラー口絵 2 ページ

はじめに

第1章 火山噴火とはどんな現象か

第2章 噴火のタイプとその特徴

第3章 噴火は予知できるか

第4章 噴火が始まったらどうするか

第5章 火山とともに生きる

あとがき

『火山の大研究』

<パート1> 「火山の正体としくみ」

<パート2> 「火山からのおくりもの」

<パート3> 「ふん火と災害」

「さあ！ やってみよう」(実験)

「教えて！ 火山学者の仕事」

(北海道大学 橋本武志)